大久保典夫著『岩野泡鳴の研究』

伴　悦

本書は『岩野泡鳴』（昭和38）と『岩野泡鳴の時代』（昭和48）のあとを継ぐにふさわしい大著である。本書のもくろみは、泡鳴の生涯の山場とみた樺太行から北海道放浪までの「伝記研究」に決着をつけられたら、かたちにしようと考えていたようである。

思えば『岩野泡鳴』の出版記念会は、昭和三十八年十二月六日に、東中野のモナミで開かれ、私も出席している。もう四十一年前のことになる。私の学部のときの師でもあった本間久雄先生をはじめ、稲垣達郎先生、川副国基先生、それに「批評」同人の諸氏等が列席していた。

この本には本間久雄先生の清慈あふれる「序」が付されている。先生によると大久保氏の学部卒論は「徳田秋声に関する精緻な考証的論文であった。」という。卒業後、氏は労働運動の争議に連座し、疲労と困憊のなかで、転向を余儀なくされ、このとき、偶然目にした美しい夜景と相俟って突如として岩野泡鳴が、「巨大な影像」となり、死から生への象徴、転機となったのだという。本間先生はこの経緯をとらえて、「心機の妙転」といわれ、このような稀有の体験が、この研究の出発点となったことを祝福されていた。

さて本題に移らなくてはならないが、四一一頁に及ぶ大部の全体にわたることは、しょせん不可能であるので、まことに勝手ながら、比較的新しい諸論の中、特に心にとめた部分を中心にして書かせていただくことにしたい。

ところで全体をみわたせば、「第一部　伝記」、「第二部　研究と批評」、「第三部　岩野泡鳴周辺」、「年譜」となって構成されている。この部たてのなかでも、一番力を入れたのは「伝記研究」であったとみてよい。それは御座成りの作品分析などを行う以前の問題として、まず岩野泡鳴という作家が、かかわった時代や場所で、どのように「生の象徴」たりえたか、そこからきこえてくる総体的息づかいといったものに対して、きわめて層のあつい考証のなかで心熱を注いだということに尽きるのではないか。

例えば「『耽溺』とその周辺」のうち、「(2)甲州塩山温泉」での泡鳴と増田しも江の甲州塩山温泉行きの一件にも、顕著にそれはみられる。『東山梨郡誌』や『向嶽寺史』、『山梨県市町村自治名鑑』などの資料を基にした塩山の鉱泉の湧出の歴史、主効などの明示。また向嶽寺と温泉のつながり、泡鳴が泊った海老屋の考証など注目されるところである。そうした多層な考証と「耽溺」の虚構性のあわいについて、またそれがその時代とどのようにつながっていくか、慎重な論証がなされていく。

「樺太行」では、「実業之北海」の「岩野泡鳴の罐詰談」や『樺太沿革・行政史』などの資料を配して、「樺太通信」を軸に、泡鳴の思想、行動、関連事項が克明に辿られている。

次の「北海道放浪」は、なんといっても一番力が込められた部

分で、本書の白眉の一章といっていい。和田謹吾の「泡鳴『放浪』モデル考」（『風土のなかの文学』昭和40）などを援用して、自説を述べたり、また「実業之北海」の主幹山本露滴について、北海道歌人会編『北海道歌壇史』（昭和46）から、歌文集『金盃』（明治41）を挙げ、四首ほどの引用がある。このほか「実業之北海」のことや露滴と結ばれた貧乏な娘のことが述べられているのが印象的である。

別に「北海タイムス」の編集長政民山口喜一の詳細な職歴や、北海道を代表する新聞人で、『老新聞人の思い出』（昭和32）や『歌集　追憶』（昭和36）があること、芸術家肌の露滴や泡鳴とは、まったく異質の市民ジャーナリストであったという指摘もある。

さらには「(3)『悲痛』の〈生〉（レーベン）」の一章は、「断橋」の釣り橋の場面から、札幌豊平川の鉄橋における心中未遂事件にいたる間の伊藤博文の暗殺事件やこれにからまる中学校での演説事件について、ここでも和田謹吾の「泡鳴の虚実」（『北海道新聞』昭和39・3・2）をひき、氏は自説を主張し、展開を試みる。

つまり和田の指摘した「伊藤公追悼演説」と銘うった泡鳴の事件設定の不自然性への疑問に関している。氏はしょせん「追悼演説」などという代物ではなく、常識とかけはなれた刹那思想の開陳の領域内のものだという。この指摘は当然のことで、伊藤の死をも自己発展の範囲内に引き入れるためにあり、ついには世界さえ飛びこえて、宇宙そのものになっていくのだから。私も別に書いたが、主人公が宇宙そのものに化してしまういわば珍奇な表象的事件は、それ自体まさに自己発展の極限値を指挙するものであったとしかいいようがないからである。そうした自己発展の内質を捉えて、氏は超越に生きる自己と凡俗の徒の落差の自覚を通して、刹那主義者の生きる「悲痛」と主張する。したがってこの生きてある「悲痛」は、換言すれば泡鳴自らいう「限りない流動、転換、肉霊合致――刹那の眩暈」、つまり混沌とした渦そのものといえる。その渦を攪拌し、転換生動化させるためには、宇宙は死滅しなければならない。自ずと物語は心中事件へと移行するゆえんである。

豊平川の鉄橋から、主人公義雄とお鳥は落下するが、下は根雪で死ぬにも死ねない滑稽話となる。ところが、この死から転生への過程が、きわめて自然で、不動のリアリティが投与されていることは大方のみかたである。氏もこのあと「『泡鳴五部作』の世界」で、「作者の精神の運動の高揚が不抜のリアリティを生んだ」といっている。氏はこの「不抜のリアリティ」の拠点を捉えて、「まったくの仮構ではなくて、それに似た経験ないし体験があった、に違いない。」と断案を下している。私もそれ自体まったく否定しなくてもいいかも知れないと思うし、他でもその具体例として、仙台時代の自殺未遂の体験などを挙げるものもいる。そうした経験ないし体験、あるいはこれに類するヒント、情報についての詮索考量も大事だろうが、作品分析にあたっては、これとは別に、初出と「泡鳴五部作叢書」との異同、これにかかわる一元描写への統一の件などを前提に、当面の問題としては、五部作にみられるクライマックスの場が、なぜ釣り橋や鉄橋といった

「橋」なのか。このことはあきらかに作者が意図した「橋」の隠喩性に基づくものであるとみたい。私はこれをニーチェなどに関連させて立論を試みた。さらにいえば例えば鎌倉芳信の調査の上での仮構された「雪の幻影」を前提とするなら、その前提はなにゆえに、あえて繰り込まれたのかという一点も問題になる。

洪水という自然の威力のまえに、橋が断たれていること自体、即泡鳴にとって忌避すべき人間としての自恃失墜を示唆していた筈である。いまや橋を断った洪水は、根雪と転化して、別の生たらしめるために、手助けさせられているように仕組まれたのではないかとさえ考えられる。これが不動のリアリティを秘めた虚構生成の一つのありようではないかと思われる。それだけではなく思想的にいえば、泡鳴の「旧日本の滅亡」の認識による「新思想の由来」やこれにかかわる新提起実現のために、用意された一大通過点として、「憑き物」出現の意義は大きいものが秘められていたようにも思量されるのである。

「五部作」分析で一番重要な問題だけにいささか自説をはさみすぎた感があることをお許しいただきたい。

次に「研究と批評」のうちでは「泡鳴最後の小説集（解説・解題）」で、荒木郁子の生涯にふれた村松剛の「泡鳴の最後の恋人」（昭和40）と荒木滋子を「泡鳴最後の愛人」と断じた「生方敏郎翁談話」（柳田知常『岩野泡鳴論考』収）を対比して、氏は滋子は単に女友達で「最後の愛人」では断じてないと主張している。また『公爵の気まぐれ』所収の異色作「大将の疑惑」について、昭和十七年十月、「東京新聞」の「大波小波」に載せた平野謙の再評価――乃木将軍の柔軟な「疑惑」と率直な心情を特にとりあげている部分もおもしろいと思った。と同時に当時のいろいろ問題ぶくみの平野謙の生きかたにも大いに関心を抱かざるをえなかった。

「岩野泡鳴周辺」では、「井伏鱒二と岩野泡鳴」が断然おもしろい。氏は寺田透の「井伏鱒二」（昭和23）と「岩野泡鳴」（昭和23）に着目して、寺田が実際の行動によって自己の文学を豊富にした日本近代文学史上たぐいまれな二人の作家として、鷗外と泡鳴を挙げたことや、泡鳴の「有情滑稽物」の秀作にみられる「内面の柔軟さ、綿密さ、また、他者への気くばりは、井伏の小心さと通うものがある。鷗外―泡鳴―鱒二。この三者は、その裏質においてかなりの共通項があるように、わたしには思われるのだ。」といっている。

さらに「泡鳴周辺の人びと（三人の妻）」は、遠藤清、竹腰幸、蒲原英枝の三人の色調、風合いにふれたものである。臨川書店版全集で大量に発掘された資料を基軸に、三人のそれぞれの生地、家系、来歴、文化活動等、まさにその女性たちの生きざまを、稠密精緻に考証したものである。いわば氏の特異なる筆勢に熱をおびた独壇場といえる部分である。泡鳴研究だけではなく、日本女性史上の研究分野へ一石を投じた意味も大きい。これに加えて「岩野泡鳴と『青鞜』の女たち――遠藤清子を中心に」も忘れてはならない逸文である。

また少し古い発表の「岩野泡鳴における詩と劇」も当初からの力作として知られている。『日本主義』の周辺――押川方義・飯

野吉三郎と岩野泡鳴」も貴重な論である。他にもふれなければならないものがありながら、いまは触れられないのが残念である。いずれにしても岩野泡鳴研究一筋に約半世紀にして成った本書の出現は、まさに期を画するものであり、今後の泡鳴研究には、不可欠なもので、裨益するところ大であることはまちがいない。

それにつけても「あとがき」末尾にある「岩野泡鳴研究も、母の物心両面での援助によるところ大である。おのずからの心の動きが献辞となった。」の一条はなんとも美しい。本書の出現をいちばんよろこんで下っておられるのも氏の御母上であることをかたく信ずるものである。

（二〇〇二年一〇月　笠間書院　A5判　四一一頁　税込七一四〇円）

新刊紹介

伴　悦著『明日に繋げて』

ブッシュ米政権の強硬な姿勢、それを支持する現在の日本のあり様に対して、著者の憂慮は日増しに高まっている。冒頭に掲げられた五つの手記（『きけわだつみのこえ』より）。戦時下に育ち、兄を奪われた著者の想いは我々の想像をはるかに越えたものなのかもしれない。著者は切々と言葉をつむぐ。現在に「どうしても語り継がなければならないこと」があると。

本書は戦争の問題、生と死の問題を、おもに横光利一・正宗白鳥・モンテーニュ・トルストイの文学、その生涯から見出そうとしたものである。こうした厳粛なテーマを語る一方で、戦後の数年間、要書房に勤務し多くの文学者（川端康成や中野好夫など）に直接触れる機会を持った著者ならではの滑稽なエピソードも散りばめられているが、青春を送りえなかった死者達への消せぬ想いは通い続けている。

書き下ろされた多くのエッセイの中に配置された横光論、白鳥論は研究を志す人ならずとも必読と思われる。一つの対象を追いながらも、西洋の文学や思想にまで行き届いた著者の視野の広さに驚かされることだろう。

（二〇〇三年一二月　審美社　四六判　三三四頁　税込三七八〇円）　〔尾形　大〕